

「自分の種類とその性別」

佐賀県 白石町立白石中学校 3年

小川 一花（おがわ いちか）

今は成長もあって珍しいことになったが、昔私はどこに行っても男の子に間違えられた。初対面の人は必ず私の顔を見ては首をかしげ次に出てくる言葉は「男の子？」だった。一応否定していたものの、私にとってそれは確かにうざったいことではあったが、男の子と思われることに対しては嫌ではなかった。どちらかというとかっこいい物のほうが好きだったし、女の子のような身なりにはなりたくないと思っていた。何より自分が女の子であることに少し違和感があった。祖母から「女の子なんだから」と言われるたびに嫌な気持ちになり、ワンピースもピンク色も身につけないようになった。

しかしそれは昔の話であって、今は「女の子用の物」嫌いも幾分かやわらいだ。そんなある日、私は「LGBT」という性的少数者に指す言葉を初めて知る。「LGBT」はそれぞれの頭文字で、レズビアン、ゲイ、バイセクシャル、トランスジェンダーを組み合わせたものだ。同性が恋愛対象の人、異性同性共に好きになりえる人、心と体の性別が一致しない人。私はその人たちの存在にすごく興味を持った。その当事者たちの苦勞話の記事をたくさん読んで、その苦しみを理解していくうち、あたりまえに過ぎる日常や、決して深い意味のない言葉に苦しめられていたのだと知った。しかしそれは私にあてはまるものではなかった。まだ少しもやっとする気持ちを残しながら、もっと深く調べていくうち、新たに「LGBT」という言葉だけでは表せない性、「LGBTQ」を知り、「X ジェンダー」にたどりついた。その記事を読んでいくうち、長年のわだかまりがとける瞬間が分かった。X ジェンダーとは、男性、女性に完全にあてはまらない人を指すものである。その自認は人によって多様で断定できるものではない。例えば私だと、女でありたくないが男になりたいわけでもない無性と呼ばれるものになる。今はそれが一番しっくりくる性自認だ。私は自分が女性だとどこかであきらめていたのだろう。X ジェンダーの例にあてはまる部分がたくさんあったことで、仲間がいるということ、別におかしくないということが分かってスッキリした。やっとな自分という人間の種類がはっきりしたように思えたからだ。

しかし、自分のような X ジェンダー、LGBTQ をすんなり受入れてくれる人はいるのだろうか。一般的に考えてそのような人は少ないと思う。その人たちにとって異性を好きになることがあたりまえで、性別の例になるような格好でいることを普通とする。それは私たちにはあてはまらないことだ。つまり「普通ではな

い」と判断されてしまう。それによっていろんな偏見が生まれ、差別されてしまうので心に秘めたままの生きづらい世の中になってしまう。私は叫びたくなった。「普通」とは誰が決めたのか。誰かが決められるものなのか。何故自分を隠さねばならないのか。そう考えるとこの世の中はおかしいことであふれている。

今の時代、LGBTQ がメジャーになりつつある。支援団体の発足や LGBT という言葉の広がりなどで、テレビにとりあげられたりして世間による認知も高まってきたと感じる。私たちマイノリティーに共感しろとは言わないが、理解してほしい。「どうせ女だろ」「そんなことして何になる」「普通にしろよ」全て私たちが傷つけていることを理解してほしい。私たちは一人一人違う生きものだ。誰一人として同じ人はいない。しかし人間という生きものは支え合ってお互いを理解しあって生きていけるはずなのだ。今、この瞬間も心の溝をうめられない人が苦しんでいる。差別の目があるから、SOS も怖くて自分から出せない人もいるのだ。私達は助け合える。ぜひ手を差しのべて「大丈夫だよ」と言ってほしい。そしてもしも世間というような大きな壁があなたの自己をふさいでしまうのなら、どんなに小さくてもいいから救いを求めてほしい。それがセクシャルマイノリティーの理解を求め支援できることにつながると思う。そしてこの社会にはセクシャルマイノリティーが特別で異質なものという認識ではなくごく自然なあたりまえで人それぞれのものという認識をしてほしいと思う。

今や十三人に一人といわれている LGBTQ。決して他人ごとではなく、あなたの周りにも言わないだけでいるかもしれない。生きやすい世の中にするために女らしさ、男らしさを求めない社会になってほしい。私自身も自分のことを深く理解し、今後の行動に生かそうと強く思った。